

東京。

sanukisoba

東京に住み始めてから1ヶ月と少しが過ぎた。4月から大学に入り、実家のある長野を離れ、初めての一人暮らしをしている。特に東京に来たかったわけではないし一人暮らしを望んでいたわけでもないけれど、地元の小学校、中学校と順調に進み、高校受験をした段階で俺は自分が勉強のできる方の部類に属することを知らず。高校に入ってからそれは衰えることがなく、長野の中でもトップクラスの高校で上位の成績を保持していた。トップ10に入るほどではなかったけれど、それでも学年上位集団から落ちることのなかった俺はただ漠然と信州大にでも行けばいいと思っていたくらいで家を離れようなんて思ったこともなかった。

風向きが変わったのは高3の進路指導の時間だった。俺と教師と母の三者面談で教師が俺に東京の大学への進学を勧めてきた。理由は色々と言っていたが要約をすると就職に有利、院に進学するとしても選択肢が広がる、東京のトップクラスの大学を狙える、なんなら後期日程で信州大を受ければ充分滑り止めになる、この成績で信州大はもったいないということだった。もともと東大一橋クラスを狙えるほどでもなく、トップクラスとはいえ所詮地方の公立校で毎年3~4人東大に進学すれば御の字というような高校だったから、トップ集団に属さない俺が東京に進学すると言ったって馬鹿高い学費を払って中堅の私大に行くくらいしかできないだろうなと考え、はなっから東京の大学なんて選択肢はなかった。両親もどちらかと言えば俺と同じ考えだった。下手に都内の中堅私大に行くよりは、地元トップの大学を出た方が就職に有利。父親はそれを体現した人間だからなおさらだった。父親は俺と同じ高校を出て、信大を卒業し、地元でもっとも有名な企業に勤めている。

しかし、蓋を開いてみたら俺は都内の中堅私大に在籍していた。理由は単純で、センター試験でコケた。センターでコケてしまい国立が絶望的になり、俺は教師の思惑通り都内の大学に進学し母校の進学実績に華を添えた。早慶には遠く及ばないけれど、早慶に落ちた人間が集まる俺の大学は、妙な自意識と自負に満ち溢れた学生だらけで、入学した当初は浪人を選ばなかった自分の選択を後悔したものだ。だが、1ヶ月も経つ頃にはバイトも決まっていたしそれなりに東京にも馴れてきたこともあってしっかりと東京に居場所を確保してしまったので別段後悔も何もなくなってしまった。所詮はその程度だ。

俺が東京に居場所を確保してから、この物語は始まる。それまでの経緯はもう、忘れてかまわない。

\*\*\*

俺のバイトは小さな会社の小間使い。書類作成と書類郵送の多い職場なので、社員から言われた通りに書類をまとめ、郵便局に持っていく。それが主な業務の非常に楽な職場だったが、時給は950円と労働の割にいい額をもらっていたので俺は十分に満足していた。

俺の面倒を見る社員は、ちょうど4月にこの会社に就職したばかりの新人社員で、彼もまた地方から上京して来ていた。故郷は東北で、大学まで地元で過ごした彼の喋りには若干の訛りが残っている。入ったばかりで特に死後もまかされずまずは小間使いのやっていることを覚えてそれから、ということで彼は基本的に俺と一緒に仕事をするが多かった。バイトと同じ仕事なん

て気分は悪くないのかなどと思うこともあるのだが、熱心な彼は「すべては勉強ですから」と真面目に取り組んでいる。

5月の連休も終わってから一週間ほど経ったある日、俺がバイトに行くときまだ彼は出社していなかった。彼がこないのは珍しいなと思っていると、始業から20分くらい経ってようやく彼が姿を見せる。どうやら山手線が遅れていたらしい。上司に遅れた旨報告をし、彼は俺のいる作業用のスペースにやって来た。

「水谷さんが遅れるなんて珍しいですね」

と俺が話しかけると彼は苦笑いしながら「やっぱり東京はすごいですね。電車が止まると人が溢れるんですよ。文字通り駅に人が湧く感じで身動きがとれないくらいになっちゃうんです」と少し訛りを残しながら言う。

「今日はなんで電車とまっちゃったんですか」

「人身事故らしいよ」

思い返してみると連休があけてから人身事故がやたらと多い。俺は大学に通うのにもバイトにくるのにも自転車を使っているので影響を受けたことはないが、電車の遅れで遅刻したクラスメイトが「それを英語で説明しろ」と語学の教員に言われて慌てていたのを覚えているし、サークルの仲間も電車が止まって云々という話をよくしていた。

「最近人身事故が多いですね」などと彼と話していると、ちょうどそこに彼の3年先輩にあたる山内さんが書類を持ってやって来た。何の話、と聞かれたので説明をすると彼は「都内は連休が明けると人身事故が増えるんだ」と言う。俺たちが興味を示したので山内さんは手近にあった椅子に腰掛け、雑談に参加した。

「5月病って言うだろ。水谷君もバイト君も4月から東京に出て来て、新しい生活を始めたわけだけど、そういう奴らが都内で5月病に罹患しちゃうと電車に飛び込んだりするんだよ」

「なるほど」とは彼。

「でもな、こんな話を聞いたことはないか。連休あけると電車の混雑は緩和するって」

「あ、あります」とは俺。これは大学に入りたてのころ教授がよく言っていた。4月に入ると東京に出てくる人が一時的に増える、これは感覚的なものだが少なくとも4月に入ると朝夕のラッシュの時間の混雑度が一気に高まる、と。だが、それも5月の連休があける頃には落ち着いてくるから初めて東京に来て気後れしてる人もその頃にはラクになるよ、と。電車を使わない俺はそのとき聞き流していたけれど、その話を山内さんに言うと山内さんは「でも、その理由までは教えてくれなかったんだな」と笑顔で言う。「理由って、あるんですか」と彼が質問する。

「バイト君は5月に入ってから大学の学生が減ったと思わないか？」

「あ、はい。少し授業に参加する人が減った気がしますね」

「なんでだと思う」

「いや、ちょっとわからないです。サボり始めたんでしょうか」

「じゃあ水谷君はどう、最近通勤電車の混雑は本当にラクになったと思うかい」

「馴れもあるかもしれませんが、はい。ラクになりました」

「あのな、つまり単純に言うと4月に東京に入って来た人間が、連休で一気に減るんだよ」

山内さんは俺たちの顔を見てから話を続ける。

「4月に東京に入ってくる人間ってのは何も知らず、のほほんと、人によっては期待をもって東京に入ってくる。でもな、東京に来るとその人の多さやスピードに圧倒され、無機質な雰囲気と新しい生活に馴染めない奴が出てくるんだ。ちょうどそんなときゴールデンウィークがあるだろ、で、地元に戻るわけだ。するとやっぱり地元の方がいい、もしくは地元でのんびりした時間を過ごすうちにやっぱり別の人生を歩みたいと思い始めたりする。人によってはそのまま連休があけても東京に戻らないまま地元で縛られたりするし、人によっては東京に戻ることなく、別の人生を選ぶ。するとな、連休を境に東京の人口ってのは減っていくんだ。これがその教授の話の理由だよ」

俺たちが感心した顔でいると「ま、真偽のほどはわからんけどな。俺も誰かに聞いた話だ」と席を立つ。

なぜか俺にはその話が印象に残っている。東京というのは不思議な土地だ、と。

\*\*\*

水谷さんの様子が少しおかしいな、と思ったのは6月の中旬を過ぎた頃だった。それまで遅刻も早退も有休もなかった彼だが、少しずつ休みや遅刻が目立つようになって来た。俺は週に2日しか勤務日がなかったので偶然が重なっただけかもしれないが、水谷さんのいない部屋で黙々と作業を続ける日が3日ほど続いたので、俺は山内さんをつかまえて聞いてみた。最近水谷さん見かけないんですが、と。

山内さんは困ったような顔で頭をかきながら「最近休み多いんだよ。アイツも東京がわかっちゃまったのかな」と言った。「わかった？」と俺が尋ねると山内さんの後ろにいた40歳くらいの社員が「東京の異常さが、ってことだろ。地方から出て来た奴で連休前後に東京を去っていく奴ってのは異常さがわかる前にやられちゃった奴らだ。奴らはただ単に自分の中にある何かに従って行動しただけなんだが、この時期になって東京にやられちゃった奴ってのは大抵東京をある程度理解し、異常さに気付いてしまうんだけどそれに慣れ始めちゃってるから簡単に抜け出せず悶々とするんだよな」と会話に混ざって来た。山内さんはそうそう、と頷いて「ま、水谷戻るまでなんとかやってくれ」と言い残して去っていった。

メディア関係と言えばメディア関係の、タウン誌関連の会社ということもあり社員は東京に詳しいし東京に対して何かしらの見解、見方というものを確立している。そんな中で、東京に入ってくる人間の行動原理というのはどうやら共通見解のようで、あまり見解の相違は見られない。俺も東京に慣れてくればそういう見方をできるようになるのだろうか、などと思索にふけりながら俺は作業をこなし、定時で退社した。空梅雨のおかげで自転車通勤ができていた俺は漫然とペダルをこぎながら彼も電車通勤だったらもう少し気が楽になったのだろうかなどと考えていた。

結局、水谷さんが会社に戻ることはなかった。7月のある日俺が出社すると山内さんがやってきて「アイツ辞めちゃったよ」と教えてくれた。山内さんの話によると前日に電話が掛かっ

て来て、辞めますとだけ伝え理由は何も言わなかったらしい。山内さんも彼が辞めることは予想していたので「そうか、じゃあ人事に電話つなぐな」としか言わなかったらしい。ただ、人事に電話を転送する前に、今後どうするのかだけは聞いていた。山内さんは山内さんで、地方から出て来た自分の後輩がこれからちゃんと暮らしていけるのかというのが気になったようだ。これに対して彼は「東京を出て別の人生に挑戦してみます」としか教えてくれなかった。「ま、なんとかなるだろ」と山内さんは全く心配していなくて、俺にはそれが意外だった。そんな俺の心中を察したのか「東京を出れば、生きていくことはできるだろ。東京なんてどこじゃ生きてたくても生きられねえよ。」と笑いながら作業スペースから出て行った。

結局水谷さんは退職となった。俺にとって人が辞めるというのは相当にインパクトのある出来事だったし、会社にとってもそれは同じことできっと会社は衝撃を受けているんだろうなと思ったのだが、そんなことは一切なく会社は今まで通り何も変わらずに業務をこなしていった。まるで彼なんて最初からいなかったかのように。

\*\*\*

その後も淡々と日常は過ぎ大学のテストも終わって7月も下旬。ある日出社すると山内さんが作業スペースで俺を待っていて「おう、今日は霞ヶ関行くぞ」と告げる。バイトを初めて2ヶ月くらいだが、外出なんてしたことのない俺は突然の宣言に驚く。「ちょっと持ってってもらいたい書類があるんだけどな、俺も霞ヶ関でちょっと調べものしたいからついでに手伝ってくれ」といいながら俺にSuicaを渡す。促されるまま俺は山内さんと一緒に地下鉄の駅に向かった。

「で、どうだ。バイト君は東京に馴れたか」

静かとは言えない地下鉄の車内でも山内さんの声はよく通る。俺は「多分馴れたと思います」といったような返事をする。山内さんは穏やかな顔で「そうかそうか。それは何よりだ」と言いながらも「だがな、ここがすべてだと思ふなよ。東京を出れば世界は広がる。それだけは忘れるな」と付け加えた。とても真面目な顔で。「お前はまだ若いんだ。東京に飲み込まれる前に東京を出て行く方法も考えとけよ。東京だっていつまでもつかわからんしな」

俺には意味がよく分からなかった。多分東京で長く暮らし、東京を相手に仕事をしていると何か感じるところがあるのだろうくらいにしか思えなかった。それを山内さんも感じたんだろう。

「東京ってのは入れ物なんだよ。霞ヶ関に着けばお前もわかるだろ。少くくは」

山内さんの言う通りだった。霞ヶ関に着いて数分歩いたところで俺は東京の不気味さを初めて実感した。

大学に入り、コンパだなんだとそれなりに繁華街や有名なスポットは回った。池袋、新宿、渋谷、原宿。どこも人に溢れ活気に満ちていた。だが、山内さんに言わせるとそれらの街はすべてまやからしい。東京の真の姿を見られるのは霞ヶ関だけだと。そうしたことを地下鉄の中で教えられたからそう思ってしまったのかもしれないが、いや、それがなかったとしても霞ヶ関の

もつ不気味さを実感しただろう。これはわかるとかわからないの話ではない。単なる真実なのだ。

俺の地元の街は小さくはないが、かといって大きいと言えるほどでもない。だが、街には人が溢れ、人々はその街で暮らし、その街は人々によって造られていた。そんなことは誰に説明されなくとも「わかる」ものだった。人なしでは街は成り立たない。街には人がいて、街は人を必要としている。それが俺にとっての、いや、俺の地元にとっての事実だった。

しかし、霞ヶ関は違う。俺の地元の何倍何十倍も的人がその街を歩いてはいるものの、この街には人なんてひとりもない。東京じゃない街で暮らして来た俺にはそれがすぐにわかる。誰ひとりとしてこの街を造っている人はいない。この街は人なしでも成り立つ、入れ物の街だ。俺は衝撃を受けた。世の中にはこういう街もあるのだ。そしてこの街において人というのは必ずしも必要とされていない。

田舎者だからこそ感じるのかもしれない薄ら寒さを感じたとき「俺の言いたいことがわかったか」と山内さんが尋ねる。「そうですね。この街には人なんていないんですね」山内さんは満足そうに笑う。

「やっぱり東京に入りたての奴はわかるんだな。いや、感じるのかもしれないな。そうだよ、東京ってのは人のいるところじゃないんだ。誰もが東京にくる。だが、あくまでそれは通過点であって、やがては東京を出て行くんだ。中には東京にとらわれて出て行くことができなくなる奴もいるがな」

\*\*\*

8月に入り、大学が夏休みになって俺はバイトの日数を増やした。週3日勤務にしてもらい、1日おきに出社することにした。この会社は面白い会社で、アルバイトにも盆休みを与える。もちろん給料は出ないがその代わり社長がポケットマネーで帰省費用をくれた。これでちゃんと親元に顔を見せにいけということだった。帰省費用をもらったその日がお盆前最後の勤務だったので、俺は山内さんに誘われて夕飯をとることにした。

山内さんが俺を連れて入ったのは会社の近所の鳥料理の店で、俺は親子丼を頼み山内さんは焼き鳥の盛り合わせを頼んだ。俺が未成年ということもあり山内さんは俺の前では酒を呑まないし俺に呑ませることもしない。「最近腹が太くなってな。炭水化物控えてるんだよ」と笑いながら焼き鳥を頬張る。親子丼は卵が半熟でとても美味しかった。

「そういえば、社長から帰省費用渡されましたよ」と俺が切り出すと山内さんは頷きながら「ちゃんと故郷に帰れよ」と言う。

「社長と同じこと言うんですね。ちゃんと親御さんに姿見せてこいっていわれました」

「言われた通りにしておけよ」

山内さんは真面目な顔でそう言う。

「でもまだ地元離れて5ヶ月も経ってないですよ。戻ろうと思えばいつでも戻れるし、この時期帰りの電車も混んでるし」

というと山内さんは少し悲しそうな顔をする。

「あのな、電車が混むってことはそれだけみんなその時期には地元に戻るってことなんだよ。みんなが帰るってことは、地元ではみんながその時期にみんな待ってるってことなんだよ。そうさ。クリスマスにケーキを楽しみにするように、盆休みには離ればなれになった家族が再会を楽しみにするんだ」

「いやあ、でも……」

俺は正直、盆休みの時期に帰省するのはちょっと面倒くさかった。電車は混むし、それに長野というのはそんなに遠い距離でもない。7000円も出せば電車で片道3時間だ。その気楽な距離感が俺を帰省から遠ざけていた。

山内さんはさっきより悲しそうな顔になっていて「そうか、まだ気付いてないのか」と呟いた。「え」と俺が聞き返すと山内さんは座り直し、俺の顔を真っ正面から見据えた。

「盆休みってのは帰省のシーズンだよな。東京からみんなが帰省して故郷に戻る。東京の人間ってのは盆休みには故郷に戻るんだ。ところでおまえ、盆休みってのは東京の人間以外に誰が帰ってくるか知ってるか」

「牛や馬の話ですか」

「そうだよ。盆に帰省するのは死んだ家族や親戚だ。俺たちは盆休みに故郷で死んだ連中を迎えるために帰省する。そうだろう」

「ええ。文化論的な話をするなら」

山内さんはちょっとだけ肩の力を抜いて話を続ける。

「文化論じゃないんだな。そして俺たちと死んだ連中ってのは別物じゃないんだ。盆に帰省する死んだ連中ってのは東京から帰省する連中のことなんだ。盆休み以外に帰省したところで俺たちは迎え入れる準備をされてないからな。家族には会えないし、家族にしたって俺たちに気付かない。だから俺たち東京の人間は盆休みにラッシュをつくってまで帰省するんだ。家族に会うために。俺もお前も、東京に入って来た連中ってのは、みんな死んだ連中なんだよ。そして、東京から出て行く連中ってのは、生まれ変わって別の生を選んだ連中なんだ」

「SFみたいな話ですね」

「水谷は、どんな人生に生まれ変わったのか、俺はそれだけが気になってるよ」

俺の言葉には耳を傾けず、山内さんはただ「お前もまだ、若いのにな」とだけ呟いた。